

幼小接続期（架け橋期）における保護者の不安：フェーズ

2 以降の、よりきめ細やかな子育て・子育て支援を目指して

森野美央（長崎大学教育学部）・椎場奈穂子（くほんじこども園）・
古谷嘉一郎（関西大学総合情報学部）

問題と目的

5歳児から小学校1年生の2年間は、幼小接続期（近年では架け橋期）と呼ばれ、重視されている。この時期は、子どものみならず、保護者についても、子どもを支える援助者、更に移行の当事者として支援が必要であるが、保護者の不安を取り除く方法など、まだ明確にされていない部分が多い（一前, 2017）。

幼小接続期における保護者の不安を捉えた大規模調査として、伊藤・山内・岩崎・細川（1997）がある。伊藤ら（1997）は、小学校入学予定児の保護者を対象に、子どもの入学にあたっての心配を質問紙で尋ねた結果、入学予定児の保護者は比較的不安が高く、特に児が第1子の場合の不安が高いこと、幼稚園と保育所による違いは見られなかったこと、保護者の心配が高かった上位3項目は、第1子の場合もそうでない場合も、友達、先生、勉強であったことが報告されている。

伊藤ら（1997）では、子どもに対する不安の概要が明らかにされているものの、保護者自身に対する不安については明らかにされていない。しかし、保護者は、たとえば新たな保護者付き合いやPTA役員、特に有職者では自身の生活時間の变化など、自身についても何かしらの不安を抱え、その不安が子どもに対する不安を強めたり、子どもに対する不安が自身に対する不安を強めたりと互いに作用する可能性も推測される。伊藤・細川・岩崎（1996）は、小学校についての情報源として、園や小学校の先生から、が極めて少なく、保護者間や子どもの兄姉から、が多いこと、有職者は情報源が多様である可能性があることを指摘している。不安の程度が高い場合でも、情報源の多様さが不安を和らげる方向に働いたり、不安との関連が報告されている強い疲労の自覚（林田・中・深田・草野, 2003）が和らいだりする関係性も予想される。保護者の不安については、自身に対する不安や仕事の有無、情報源の多様さなども含めた詳細な検討が必要である。

昨今は、幼小接続の取組進展により、文部科学省（2022）で示されている「基盤づくり（フェーズ1）」を経て、「検討・開発～改善・発展サイクルの定着（フェーズ2～4）」の段階に入る園が増えてきた。こうした段階に入った園の保護者が抱える不安を捉え、実態に即した支援の在り方を考える必要もあるだろう。

以上のことから、本研究では後者に入る園で保護者の不安を詳細に捉える検討を行い、よりきめ細やかな子育て・子育て支援への示唆を得ることを目的とする。

方法

調査対象者

X市内 A 幼稚園と B 保育園に通う、次年度小学校入学予定児の保護者 87 名を対象とした。回答を得た 62 名のうち（回収率 71.3%）、分析に必要な質問への回答があった 59 名（A 幼稚園 45 名、B 保育園 14 名）を分析対象とした（有効回答率 95.2%）。なお、どちらの園も同じ地域にあり、調査年以前に幼保小連携推進事業へ合同で取り組み、小学校と接続カリキュラムを作成・実施している（架け橋期のカリキュラムにおけるフェーズ 2～4 の段階；文部科学省，2022）。

調査期間

20XX 年 7 月中旬～8 月中旬

調査手続き

両園とも、まず園へ調査の目的や内容を説明して承諾を得た後、担任保育者を通じての質問紙配布をお願いし、調査を実施した。質問紙は、無記名の封筒に入れて配布し、質問紙記入後は再びその封筒に入れて担任保育者へ提出するよう依頼した。倫理的配慮に関する内容は調査依頼用紙へ記載し、調査への協力は任意であった。

調査内容

(1) 回答者の属性：子どもとの関係、子どもの兄姉（年上きょうだい）の有無、就労状況を尋ねた。就労状況は「(仕事を)していない」、「正規（フルタイム）」、「非正規（パートタイム）」、「その他」の選択肢を設けて回答を求めた。

(2) 小学校入学にあたって心配なこと（子どもについての心配）：伊藤ら（1997）と森野ら（2018）で得られた結果や子育て中の保護者への聞き取りなどをもとに作成した。伊藤ら（1997）で上位にあがっていた①友達（本研究では友人関係とした）、②先生、③勉強（本研究では学習とした）の他、④通学、⑤給食、⑥座って話を聞く、⑦着脱、⑧トイレ、⑨健康、⑩体力、⑪留守番、⑫学童保育、⑬時間を守る、⑭ルールを守る、⑮挨拶をする、⑯思いやりをもつ、⑰進んで協力する、に対する心配について、「1.ない」から「4.かなりある」までの 4 段階で評定を求めた。分析では 1～4 を 1 点～4 点とした。数値が大きい程、子どもについての心配を強く感じていることを示す。17 項目の内的整合性は、 $\alpha = .86$ であった。

(3) 小学校入学にあたって心配なこと（自身についての心配）：森野ら（2018）で得られた結果や子育て中の保護者への聞き取りなどをもとに作成した。①保護者同士の関係、②PTA 役員、③入学準備、④育児相談、⑤起床時間、⑥行事参加、⑦提出書類、⑧子どもと過ごす時間の変化、⑨子どもの成長による親子関係の変化、⑩情報が少ない、に対する心配について、(2) と同様の 4 段階で評定を求めた。(2) と同じく数値が大きい程、自身についての心配を強く感じていることを示している。10 項目の内的整合性は、 $\alpha = .92$ であった。

(4) 子どもの小学校入学にあたり、特に心配なこと、悩んでいることについて、自由記述で回答を求めた。

(5) 小学校に関する情報の入手方法について、伊藤ら(1996; 1997)や調査対象園を含む幼保小連携推進事業に参画した関係者への聞き取りなどをもとに、①保護者同士、②子どもの兄姉、③子育て経験のある家族、④近所の人、⑤同じ職場の人、⑥園の先生、⑦園からのお便り、⑧小学校の先生、⑨小学校からのお便り、⑩小学校のHP、⑪説明会、⑫小学校のHP以外のインターネット(SNSを含む)、⑬本・雑誌、の13の選択肢と「その他」の選択肢を設けて回答を求めた(複数回答)。分析では、入手方法の合計数を情報入手方法(経路数)とした。数値が大きい程、情報入手の経路数が多く、情報源が多様であることを示す。

(6) 子育てバーンアウト(心理的燃えつき): 強い疲労を捉えるため、子育てバーンアウト評価尺度(Furutani, Kawamoto, Alimardani, & Nakashima, 2020)を使用した。尺度は23項目からなるが、保護者の心身負担を考慮し、因子負荷量や項目の内容から8項目を精選した(【親役割についての情緒的消耗感】①親としての自分の役割に疲れてしまっている、寝ても疲れが取れないように思える、②朝起きて、また1日子どもの相手をしないといけない時、始める前から疲れ果ててしまうように感じる。【親である過去の自分との対比】③以前のような良い父親または母親ではなくなっていると思う、④親としての自分に、もう誇りを持ってない。【親役割に対するうんざり感】⑤父親または母親としての自分の役割には、もう耐えられない、⑥もうこれ以上、親であることに耐えられない。【子どもとの感情的距離】⑦毎日の決まった仕事(車で送る、寝かしつけ、食事)以外に、もはや子どものために努力することができない、⑧自分の子どもに対して、もはや愛情を示すことができない)。評定は、「0.全くない」から「6.毎日」までの7段階で求めた。分析では0~6を0点~6点とし、数値が大きい程、子育てバーンアウトを強く感じていることを示す。8項目の内的整合性は、 $\alpha=.90$ であった。

(7) (子どもに兄姉がいる場合のみの設問) 子どもの兄姉の小学校入学を経験し、受け取りやすかった情報提供の方法について(5)と同じ選択肢を設け、回答を求めた(複数回答)。

統計分析には、SPSS version 22を用いた。

結果と考察

分析対象者の属性

分析対象者の95%が子どもの母親、5%が子どもの父親となっており、ほぼ母親による回答となっていた。子どもの兄姉は、61%が有り、39%が無しであった。就労状況は、「(仕事を)していない」が34%、続いて「非正規(パートタイム)」32%、「正規(フルタイム)」31%、「その他(育休中との記載)」3%であった。

なお、園ごとの就労状況について、A幼稚園は、「仕事をしていない」が44%、続いて「非正規(パートタイム)」36%、「正規(フルタイム)」20%、と、約6割が有職者となっていた。B保育園は、「正規(フルタイム)」が64%、続いて「非正規(パートタイム)」22%、「その他(育休中との記載)」14%、となっていた。

属性による分類

子どもの兄姉の有無と仕事の有無により、分析対象者を4つのグループに分類した(図1参照)。「その他」は、育休中との記載をふまえて仕事有りとした。

各グループの内訳を表1に示す。今回の分析対象者は、グループ(2)の26人が最も多く、グループ(4)の13人、続いてグループ(1)とグループ(3)各10人となった。グループ(1)とグループ(3)は、A幼稚園のみであった。

保護者の不安と子育てバーンアウト、情報入手の程度との関連

まず、保護者の不安(子どもについての心配と自身についての心配)、子育てバーンアウト、情報入手の程度(情報入手方法と受け取りやすい情報)について、表2に全体と各グループの記述統計を示す。受け取りやすい情報(経路数)は、子どもの兄姉の小学校入学を経験し、受け取りやすかった情報提供の方法を合計した数となっている。表2を見ると、保護者は、小学校入学にあたって、子どもについての心配と同じように、自身についての心配も抱えている状況にあることが伺える。また、子育てバーンアウトについては、グループ(3)の中央値のみ1を越えており、他のグループの中央値1未満と対照的であった。

情報入手方法(経路数)は、子どもの兄姉の小学校入学を経験している保護者と子どもの兄姉の小学校入学を経験していない保護者では、前者の方で中央値が1~2大きく、グループ(1)は、グループ(3)(4)の2倍となっており、情報源の多様さについては、有職者であることよりも、兄姉の有無や別の要因が影響している可能性が示された。なお、グループ(1)と(2)について、受け取りやすかった情報提供の数に関しては同様であった。

図1 属性による4分類

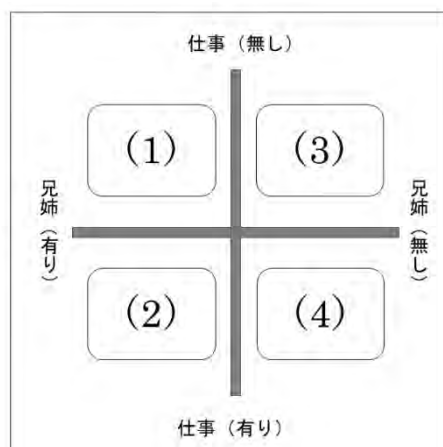


表1 各グループの内訳

	グループ(1) N=10	グループ(2) N=26	グループ(3) N=10	グループ(4) N=13
	兄姉有り・仕事無し	兄姉有り・仕事有り	兄姉無し・仕事無し	兄姉無し・仕事有り
A幼稚園	10人	16人	10人	9人
B保育園	0人	10人	0人	4人

表 2 全体と各グループの記述統計

	全体	グループ (1) 兄弟有り・仕事無し	グループ(2) 兄弟有り・仕事有り	グループ (3) 兄弟無し・仕事無し	グループ (4) 兄弟無し・仕事有り
子どもに ついての 心配	2.18 <u>2.15</u> (0.47)	1.97 <u>2.08</u> (0.43)	1.97 <u>1.99</u> (0.51)	2.32 <u>2.23</u> (0.42)	2.53 <u>2.45</u> (0.31)
自身に ついての 心配	2.20 <u>2.25</u> (0.61)	2.20 <u>2.13</u> (0.43)	2.05 <u>1.94</u> (0.47)	2.80 <u>2.73</u> (0.78)	2.80 <u>2.64</u> (0.45)
子育て バーン アウト	0.75 <u>1.16</u> (1.15)	0.94 <u>1.09</u> (0.76)	0.63 <u>1.17</u> (1.35)	1.19 <u>1.58</u> (1.26)	0.63 <u>0.90</u> (0.88)
情報入手 方法 (経路数)	3.00 <u>3.05</u> (1.76)	4.00 <u>3.60</u> (1.51)	3.00 <u>3.50</u> (1.88)	2.00 <u>2.30</u> (1.06)	2.00 <u>2.31</u> (1.80)
受け取り やすい情報 (経路数)	3.00 <u>2.97</u> (1.65)	3.00 <u>2.80</u> (1.48)	3.00 <u>3.04</u> (1.73)	—	—

注. 表内の数字は上から順に、中央値、平均値、(標準偏差)となっている。

続いて、受け取りやすい情報（経路数）以外の変数同士の相関分析を行った。今回得られたデータの特徴をふまえ、Spearman の順位相関係数を求めている。表 3 に全体、表 4～7 に各グループの分析結果を示す。

表 3 に代表されるが、どのグループでも、子どもについての心配と自身についての心配との間に、やや強い正の相関があった。小学校入学にあたって心配なことについて、子どもに対する心配を強く感じる保護者は、自身に対する心配も強く感じている可能性、あるいはその逆の関係性が推測される。保護者自身についての心配に対する支援に加え、両者の関係性も意識して支援を考える必要がある。

表 3 変数同士の相関（全体）

	子どもに ついての心配	自身に ついての心配	子育て バーンアウト
自身に ついての心配	.63**		
子育て バーンアウト	.12	.27*	
情報入手方法 (経路数)	- .03	- .22	- .04

** $p < .01$ * $p < .05$

表 4 変数同士の相関（グループ 1：兄弟有り・仕事無し）

	子どもに ついての心配	自身に ついての心配	子育て バーンアウト
自身に ついての心配	.50		
子育て バーンアウト	.41	.71*	
情報入手方法 (経路数)	.09	.34	.16

* $p < .05$

表 5 変数同士の相関（グループ 2：兄弟有り・仕事有り）

	子どもに ついての心配	自身に ついての心配	子育て バーンアウト
自身に ついての心配	.56**		
子育て バーンアウト	- .10	.09	
情報入手方法 (経路数)	.14	- .17	- .23

** $p < .01$

表 6 変数同士の相関（グループ 3：兄弟無し・仕事無し）

	子どもに ついての心配	自身に ついての心配	子育て バーンアウト
自身に ついての心配	.52		
子育て バーンアウト	.14	.71*	
情報入手方法 (経路数)	.26	.19	- .35

* $p < .05$

表 4 と表 6 を見ると、グループ (1) とグループ (3) では、自身についての心配と子育てバーンアウトとの間に強い正の相関があり、先行研究と同様に、不安と強い疲労との関連が示された。

両変数間の関連について、グループ (2) とグループ (4) では、ほとんどないか弱い正の相関であったことをふまえると、この関連の背景には、仕事の有無が関わっている可能性が高い。小学校入学にあたって、自身についての心配の程度が強い保護者には、仕事の有無を一つの目安とし、子育てバーンアウトの傾向にも気を配りながらかわっていくことが求められる。

表 7 変数同士の相関（グループ 4：兄弟無し・仕事有り）

	子どもに についての心配	自身に についての心配	子育て バーンアウト
自身に についての心配	.58*		
子育て バーンアウト	.59*	.34	
情報入手方法 (経路数)	.21	-.27	.35

* $p < .05$

一方、グループ（4）では、上述した、自身についての心配と子育てバーンアウトの関連に比して、子どもについての心配と子育てバーンアウトとの間に、やや強い正の相関が見られた。このグループは、子育てバーンアウトと情報入手方法（経路数）との間に弱い正の相関があるという特徴をもつ。他の 3 つのグループでは、ほとんど相関がないか、弱い負の相関が確認されている。これらの結果を見る限りではあるが、グループ（4）では、第 1 子の小学校入学に際し、仕事をしながら、「心配解消のためにより多く」と複数の情報源にあたって情報入手をしようとするものの、その過程や情報の多さがマイナスに作用して疲れてしまったり、子どもについての心配が強くなりすぎて疲れてしまったりする状況があるのかもしれない。

図 2 に、各グループにおける情報入手方法について、それぞれのグループの中での出現割合を求めた結果を示す。その他は、備考欄に書かれた回答が、学校園以外の子育ち・子育て支援の専門家であったため、その他（専門職）とした。

全てのグループで最も割合が高かった入手方法は、伊藤ら（1996）と同様の①保護者同士（グループ（2）は、②子どもの兄弟も同じ割合）であり、各グループとも半数以上の保護者が選択していた。グループ（1）では、その次に②子どもの兄弟、⑨小学校からのお便り、グループ（2）では、⑨小学校からのお便り、⑤同じ職場の人、となっていた。グループ（3）と（4）では、⑩小学校のHP、④近所の人（グループ（4）は⑤同じ職場の人と同じ割合）となっていた。

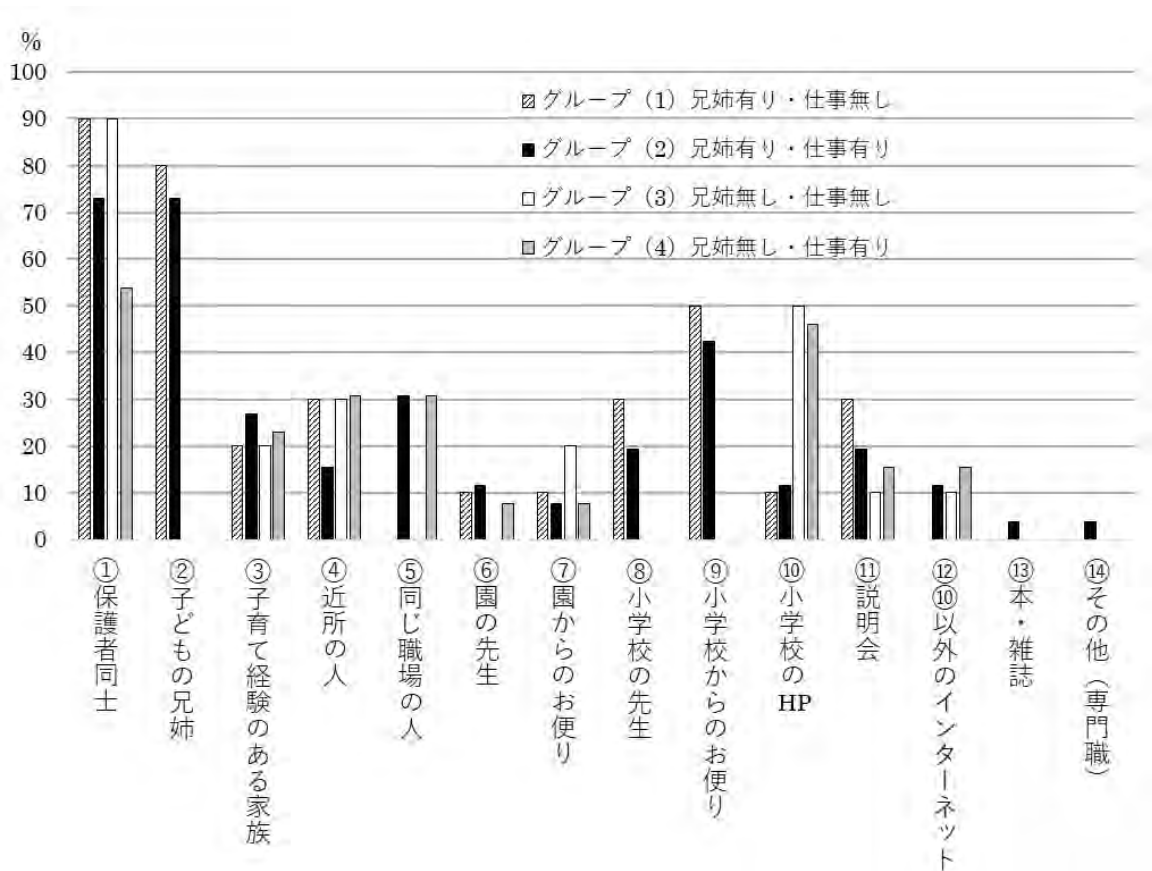
子どもの兄弟の小学校入学を経験した上での受け取りやすかった情報提供を尋ねたところ、グループ（1）（2）とも①保護者同士、次に②子どもの兄弟、となっていた。続く第 3 位は、グループ（1）が③子育て経験のある家族と④近所の人、グループ（2）が⑨小学校からのお便り、⑪説明会、と異なる結果であった。

情報入手に関して、グループ（1）と（2）であがっていた小学校からのお便りは、子どもの兄弟が持ち帰っているものも含まれている可能性が推測される。子どもの兄弟がいる場合とそうでない場合は、経路のみならず、情報の量や質も大きく異なるのではないだろうか。今回は、量や質までを捉えることができなかったが、「子どもの小学校入学にあたり、特に心配なこと、悩んでいること」を

尋ねた結果を見ると、グループ（1）（2）と（3）（4）で中身が異なる部分があった。たとえば、グループ（3）（4）では、特に心配なこと、悩んでいることとして、情報が少ないこと自体に言及する記述や、情報が量質ともに限られていることに起因する心配や悩み（学校がどのようなものか考えきれない、学童保育を利用できるか、など）があげられていた。一方、グループ（1）（2）では、和式トイレの多さ（洋式トイレの少なさ）や園と小学校の指導スタイルの違い、知らない友達とのトラブルなど、背景に具体的な情報を得ていることが伺える記述が見られた。

属性による情報格差を埋める一つの方法としては、園や小学校からの公的な情報発信による量と質の保障が有効ではないかと考える。また、「基盤づくり（フェーズ1）」を経て、「検討・開発～改善・発展サイクルの定着（フェーズ2～4）」の段階に入っている園であっても、保護者に届く情報の少なさ、更には園と小学校の物理的な環境や指導スタイルの違いが、特に心配なこと、悩んでいることに記載される現状は、幼小接続の難しさや改善・発展サイクルの必要性を示すものとして受け止め、取組の見直しに反映させていく必要があるだろう。

図2 情報入手方法
（各グループにおける割合）



子育てバーンアウトについて唯一中央値が1を越えていた、グループ(3)では、特に心配なこと、悩んでいることを記述していた保護者の割合が90%となっており、4つのグループの中で最も高かった。なお、グループ(1)は70%、(2)は50%、(4)は69%であった。グループ(3)は、子育てバーンアウトと情報入手方法(経路数)との間に弱い負の相関が見られることから、公的な情報発信による良質な情報の多さが子育てバーンアウトを和らげる手立てとして有効かもしれない。

本研究の結果から、「検討・開発～改善・発展サイクルの定着(フェーズ2～4)」の段階に入る園において、よりきめ細やかな子育て・子育て支援を目指すためには、保護者の不安を捉える際、子どもについての心配のみではなく保護者自身についての心配にも着目すること、第1子か否かに加え、仕事の有無、小学校に関わる情報の中身や受け止め方の違い、更に子育てバーンアウトとの関連などを考慮する必要性が示唆された。

今後の課題

本研究は、「検討・開発～改善・発展サイクルの定着(フェーズ2～4)」の段階に入った園において、保護者の不安を詳細に捉える検討を行い、よりきめ細やかな子育て・子育て支援への示唆を得る目的で実施したものである。調査では、対象者への負担や回収率を意識して項目を厳選したため、対象となった保護者や児の特性、弟妹(年下きょうだい)の有無、配偶者をはじめ子育て・子育てへの支援に対する満足度、小学校に関して入手している情報の中身と満足度などを含めた検討ができていない。また、「基盤づくり(フェーズ1)」の段階にある園の保護者と共通する点、異なる点の検討も今後の課題として残されている。

子育てバーンアウトについては、まだ新しい研究分野であり、子育てバーンアウト尺度のカットオフ値の決定などは、これからとなっている(木戸・植村・古谷, 2022)。研究の進展により、たとえばカットオフ値をもとに分析を進められるようになると、新たに見える部分があるだろう。

引用文献

- Furutani, K., Kawamoto, T., Alimardani, M., & Nakashima, K. (2020) Exhausted parents in Japan: Preliminary validation of the Japanese version of the Parental Burnout Assessment. *New Directions for Child and Adolescent Development*, cad.20371. <https://doi.org/10.1002/cad.20371>
- 林田りか・中 淑子・深田高一・草野美根子 (2003) 幼児をもつ母親の育児不安と疲労の自覚症状に関する研究. 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要, 4, 65-74.
- 一前春子 (2017) 保幼小連携体制の形成過程. 東京: 風間書房
- 伊藤輝子・細川かおり・岩崎洋子 (1996) 小学校入学児を持つ保護者の意

- 識調査(2)：保育園児保護者の小学校入学に関する意識調査についての一考察．日本保育学会大会研究論文集, 550-551.
- 伊藤輝子・山内昭道・岩崎洋子・細川かおり (1997) 幼稚園・保育園・小学校の教育連携の実態と課題：来年度就学予定児を持つ保護者の不安に対する保育の課題．保育学研究, 35 (2), 356-363.
- 木戸久美子・植村裕子・古谷嘉一郎 (2022) Parental Burnout (子育てバーンアウト)に関する文献レビュー．助産雑誌, 76 (2), 170-179.
- 森野美央・林 寛・山口千春・稲吉幸恵・立川亜美・前原由喜夫・吉田ゆり (2018) 遊び中心の園での子どもの育ちと幼小接続：保護者は卒園前の我が子の育ちをどのように捉えているのか．教育実践研究フォーラム in 長崎大学研究発表抄録集, 33.
- 文部科学省 (2022) 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き．(初版) https://www.mext.go.jp/content/20220405-mxt_youji-000021702_3.pdf (2023.03.31)

謝辞 本研究は、第2著者が卒業論文で収集したデータに、新たな分析を加えたものです。調査に協力いただいた保護者の皆様、園の先生方に深く感謝します。本研究の一部は、JSPS 科研費 19H01656、20K02678 の助成を受けました。